

- 本県は、大消費地を抱え、**イチジク「柘井ドーフィン」の完熟採り**により優位性を構築。**果樹のリーディング品目**として、新規栽培者の技術習得支援体制等を確立して**産地拡大を推進**(平32目標:西日本一の栽培面積100ha)。
- 県下5JA、2卸売市場、加工業者及び県で構成する**「兵庫県いちじく研究会」を発足**。平26年から新技術の普及及び需要開拓・輸出促進を展開。
- 雨よけ生産モデル産地の形成、食育・学校給食に加工品提供で消費拡大**。

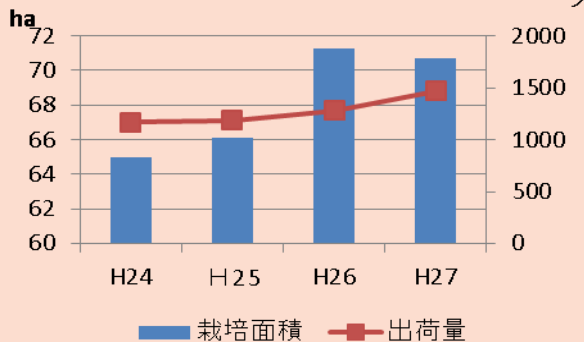
具体的な成果

1 栽培面積、出荷量の増加

(平24→27 特産果樹生産動態等調査)

- 栽培面積 65ha→71ha
- 出荷量 1,167t → 1,467t

栽培面積と出荷量の推移



2 安定供給体制の確立

- 雨による廃棄量の低減技術の普及 (平26→28)
透水性白色マルチ栽培の普及
0.1ha→3.35ha
- 雨よけ栽培の普及
0ha→4.1ha
- 凍害対策
新樹形オーバーラップ
整枝の導入
10戸0.7ha(平28)



3 需要拡大の推進

- 少量パック規格(500g/p→400g/p)流通
1JAが全面切替え
- 長距離輸送システムの構築(香港・東京むけ)
- 学校給食用いちじくゼリーの供給開始
県下3市町 15,000食(平28～)

普及指導員の活動

1 各地域毎での推進の機動的役割

- 県下の5JA毎での連携体制を構築し、推進チームによる産地の拡大。
特に淡路地区では、12.5ha → 16.1haと大きな成果。
- 新規栽培者に対する技術習得及びベテラン生産者からの技術継承を促進。
「いちじく学校」の毎月開催(淡路地区)

2 新技術実証ほをベースとした技術改良

- 雨よけ栽培(雨よけハウス、笠掛け)、透水性白色マルチ栽培等の生産安定効果、費用対効果の検証、生産者に導入支援。
- 本県開発のオーバーラップ整枝(特許取得)の導入支援

3 兵庫県いちじく研究会事業における生産・流通改善指導

- 長距離輸送システムに適する輸送性の高いイチジク生産、出荷規格の見直し。

普及指導員だからできたこと

- 専門技術をベースとして、**①新技術に対する現地での改良とマニュアル作成、②試験研究部門との連携、課題化を図り、開発技術の速やかな現地移転を進めた。**
- コーディネート活動を展開し、**関係者を結びつけるとともに、生産者やJAに対して新しい方向性を示して、具現化させた。**

兵庫県産イチジクの供給力強化と需要拡大

活動期間：平成 25 年度～継続中

1. 取組の背景

兵庫県では、大消費地を抱え、イチジク「柵井ドーフィン」を完熟採りや本県が技術開発した「一文字整枝」などによって優位に生産販売を展開してきた。イチジクは、都市近郊型果樹の強みがあり、競争力が高い本県果樹のリーディング品目である。

しかし、産地単位での市場出荷が主体であり、産地や J A が連携した取り組みが無かった。そこで、県産イチジクの供給力強化と需要拡大を図るため、県下の 5 J A、2 卸売市場、加工業者及び県で構成する「兵庫県いちじく研究会」（以下、研究会）を発足させた（平成 26 年 3 月）。研究会は「西日本一のイチジク産地づくり」をコンセプトに設定し、生産目標（平 32 年）を栽培面積 100ha、出荷量 2,400 t として活動を開始した。

2. 活動内容

(1) 面積拡大の推進

産地単位での関係機関の連携のもと推進した。県下広域的な対応としては、優良母樹からの挿し穂提供、初心者向けマニュアルの活用である。

なかでも、淡路地域の普及指導員が、「ほ場直挿し+密植栽培」による早期成園技術を確立し、イチジク栽培に大いに活用されている。

新規栽培者の技術取得には、定期的な講習会などによってきめ細やかに支援を行っている。特に淡路地域では新規栽培者向けの「いちじく学校」に加え、ベテラン向けの「いちじく大学」も開講し、担い手育成システムを確立している。



図1 いちじく学校



図2 直挿し+4倍密植栽培

(2) 安定供給体制の強化

イチジク「柵井ドーフィン」の問題は、雨による腐敗と凍害である。研究会では雨よけ技術および凍害対策を重点的に普及するため、現地実証ほ等を活用して推進を行った。

雨よけ技術では、ハウス、被覆トンネル、笠掛けに加え、透湿性白色マルチを活用して廃棄ロスの低減効果を検証した。収穫期間中毎日、生産者に収穫・廃棄量を記録してもらい、費用対効果も検証した。

その結果、総合的には、透湿性白色マルチ栽培及び笠掛けが有効であった。平成 28 年度に研究会は技術を本格的に普及するために大規模実証に取組んだ。

一方、凍害対策では、従来法である稲わら被覆に変えて、本県が開発した新樹形の「オーバーラップ整枝」（特願 2014-147213 号）による凍害を受けにくい樹形の現地実証にも取り組んでいる。



図3 籠掛け



図4 被覆トンネルによる雨よけ



図5 透湿性白色マルチ栽培



図6 オーバーラップ整枝

(3) 需要拡大の推進

従来から、県出荷規格は1パック 500g 詰めだけであった。検討会にて、個食化の時代に合わせる方向で検討した結果、平成26年に規格を見直し、400g 詰め（以下、少量パック）を提案した。

研究会の各JAで、生産者の少量パックの調製作業負担および市場、バイヤーの評価結果を共有した。農業者の生産規模や、従来の量目を評価する市場担当者によって評価が分かれたが、平成27年度から県下の1JAが全て少量パックに移行した。

平成25年から香港向け輸出に試験的に取り組んだ。県立農林水産技術総合センターらの研究により、輸送資材、輸送方法において技術開発が進んでいる。果実生産における長距離輸送に適合する栽培、収穫基準の策定を目指して、平成28年度に透湿性白色マルチを活用した生産体系を実証するなど、研究・普及が一体化して取り組んでいる。

(4) 規格外品を活用した加工の促進

平成28年度に研究会では、規格外品を活用したイチジクゼリーを加工業者への委託製造によって商品を開発した。イチジクの消費拡大につなげる狙いで、ゼリーを学校給食で提供し、イチジクに関する食育活動にもつなげている。

3. 具体的な成果

(1) 面積及び出荷量の拡大

県下の栽培面積は、平成24年65haから平成27年71haへ、出荷量は1,167tから1,467tに増加している（特産果樹生産動態等調査）。

特に淡路地域では、北淡路農業改良普及センターが中心となって、積極的な推進を図った結果、平成 22 年 8.4ha から平成 28 年 16.1ha にまでほぼ倍増した。

他地域においても、挿し木苗を供給するなどの取り組みがなされ、面積は拡大してきている。

出荷量においても、密植栽培での新植が早期成園化するなどで増加している。

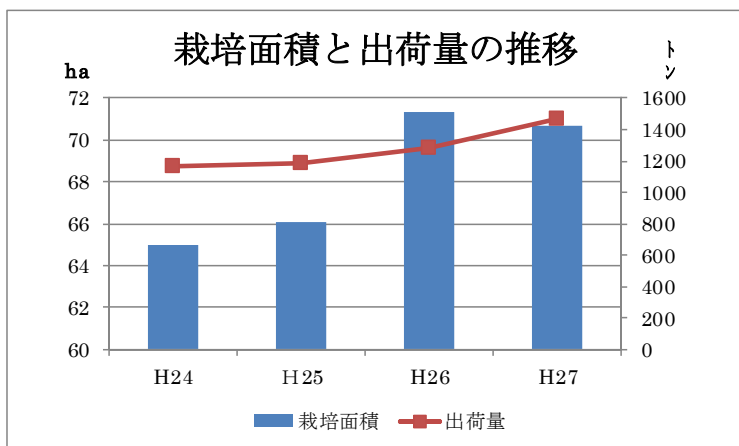


図 7 兵庫県下のイチジク生産の推移

図 8 学校給食のイチジクゼリー

(2) 安定供給体制の強化

平成 28 年度には、淡路を中心に透湿性白色マルチ栽培が 3.35ha、雨よけ栽培として笠掛け、ハウス、被覆トンネル栽培が 4.1ha 普及した。9 月の長雨の影響も少なく J A 淡路日の出の平成 28 年度販売額が 1 億円を突破し、大きく貢献した。「オーバーラップ整枝」は、現地試験園も含めて 0.7ha (10 戸) 導入された。

(3) 需要拡大の推進

平成 27 年度に少量パックに移行した産地では、キロ単価が 2 年連続で 100 円程度あがっている (平成 26 年対比)。29 年度には、さらに新たな産地が少量パックに全面移行することとなった。

長距離輸送技術開発においては、透湿性白色マルチ栽培で高品質果実の安定出荷につながる糸口が見えた。

県下 3 市町の学校給食において、イチジクゼリーが採用された (15,000 食)。29 年度にはさらに取り組む市町が増える予定である。

4. 農家等からの評価・コメント (淡路 果樹産地リーダー A 氏)

この数年間に、淡路では、イチジクによって地域活性化につながる取り組みが進み、すごいなと感じている。また、年々、違う栽培方法が普及しており、普及センター、技術センターはよく考えてくれているな、と関心している。

5. 普及指導員のコメント

(兵庫県立農林水産技術総合センター企画調整・経営支援部 役付専門員 桂裕之)

数年前まで、産地個々で振興してきた流れに加え、県下広域での生産・流通面の革新プロジェクトが始動した。さらに、民間等との連携の充実を図り、本県の強みを活かしたイチジク産業の発展を図る。

6. 現状・今後の展開等

研究会による県下広域的な取組み及び各産地毎の特色を活かした取組みの 2 本立てで産地拡大を推進する。長距離輸送技術の確立・活用による新たな市場開拓と合わせ、イチジクの消費拡大 PR 等で生産・消費の両面での充実を図る。